馬琴読本『月氷奇縁』『椿説弓張月』『南総里見八犬伝』の仮名字体の特徴

市地　英

1

馬琴の読本『月氷奇縁』、『椿説弓張月』、『南総里見八犬伝』の板本の巻之一にみられる仮名字体については、三本すべてに共通して出現する字体の用法に関する報告を既に行った。[1] 本稿では、読本三本のうち二作品に共通した字体、一作品のみにみられた字体の用例を検討し、各読本の表記の個別性と共通点を述べていきたい。

各資料における調査範囲は次の通りである。

『復讐月氷奇縁』(小説)(文化二年)[2]　巻之一　八丁オ～廿六丁オ

『椿説弓張月　前篇』(文化四年)　巻之一　七ノ下ウ～三十一丁ウ

『南総里見八犬伝　肇輯』(文化十一年)　巻之一　九丁オ～三十丁ウ[3]

これら三本は、馬琴の読本の中でもよく売れた作品として知られている。『近世物之本江戸作者部類』で、各作品について、馬琴は次のように述べている。

○月氷奇縁(『近世物之本江戸作者部類』(徳田武校注、岩波書店、二〇一四年)P212)

享和三年、『小説比翼文』二巻〔中本なり。鶴屋喜右衛門板〕、又『曲亭伝奇花釵児』二巻〔同上。浜松屋幸助板也〕を作る。この年又大坂の書賈河内屋太助に前約あれば、『月氷奇縁』五巻を作る。是曲亭が半紙形のよみ本を綴る初筆也〔出像浪華の画工に画かしむ。画工の名を知らず〕。この書大く時好に称ひて、印行の年〔文化元年〕大坂并に江戸にて千百部売れたりといふ。是より読本漸々に流行して、竟に甚しきまでに至れり。

○椿説弓張月(同P214～P216)

『弓張月』世評尤高かり。(中略)大約文化年中馬琴の戯墨、毎歳臭草紙・読本共に、十余種出板せざることなし。そのすけなき年といへども、必八、九種発行しけり。戯作者ありてより依頼、一人一筆にして、かくの如く著編の年々に多かるは前未聞也。遠方の看官はこれを疑ひて、馬琴といふもの二人も三人もある歟といへり。『弓張月』は、このゝち編を続ぐこと都て五次、その度毎に板元の利市三倍也といふ。全本廿九巻、文

化七年に至りて結局団円す。八年の春、板元平林庄五郎、作者に報ふに、潤筆の外に金拾両を以す。且北斎に為朝の像を画かせ、曲亭に賛を乞ふて、これを懸幅にして祭れり。その贏余多きをもて徳とする所也。

○**南総里見八犬伝**（同P241、P248～P249）

文化十一年〔甲戌〕、『南総里見八犬伝』第一輯五巻、『朝夷巡島記』初編五巻を綴る。この二書、編を累るに及て大く行はる。

（中略）

現この『八犬伝』は流行未曽有なりければ、三、四輯まで刊行の比よりして、狂歌師の摺物にも多くこれを模擬し、錦絵にも八犬士の綉像と模刻して、四方に鬻ぐまでに至れり。これらも前実聞といふべし。

椿説弓張月、南総里見八犬伝の後世にまで聞こえた人気ぶりはいうまでもなく、それらに比べ名が知られていない月氷奇縁も、馬琴が初めて著述した半紙本の読本にして当時の人気作であり、馬琴を読本作家として知らしめた作品であったことが窺える。後期読本隆盛のきっかけとなる作品の月氷奇縁、世間に高く評価され大流行した椿説弓張月、言わずと知れた馬琴のライフワーク的長編作品の南総里見八犬伝の初輯と、いずれも読本がいかなる体裁であり、いかなる表記であるべきか、読本というジャンルの相応しさが目指されたと推測される。

合巻に比べ、読本には字体の種類が多い[4]のであるが、読本三本の字体の総種類数を比較してみると、月氷奇縁106、弓張月103、八犬伝92とややバラつきがある。また、読本三本に共通した字体だとしても、使用数や用法に差異がみられるものがあった[5]。各本によって使用のありようが異なることが分かる。

江戸時代の資料における仮名字体の研究の多くは、語の特定の位置に使用されるといった字体使用の傾向を分析するのが中心となる。使用数が1、2例の字体は見過ごされてきたといってよい。今回の調査で、二作品に共通した字体、一作品のみにしかみられなかった字体は、先行研究では、あまり取り上げられてこなかった字体と一致する。これらの字体が使われていることにより、読本それぞれの字体の総種類数が多めとなっている。使用割合の多い字体の傾向をみるだけではなく、僅かしか使用されない字体がどのように使われているかを検討しなければ、読本の平仮名とその表記を分析したとはいえないだろう。

2

まず、二作品に共通する字体と、一作品のみにみられた字体の種類と、その使用数を概観する。二作品に共通する字体は、月氷奇縁と弓張月、弓張月と八犬伝、月氷奇縁と八犬伝の組み合わせで、計14の字体が該当する。

月氷・弓張月

【阿[6]】【可2】【川2】【徒】【登】【に】【耳1】【累】

弓張月・八犬伝

【し2】【ほ】【流1】

月氷・八犬伝

【乃】【満1】【み】

このうち、【し1】【川2】【徒】【満1】は庶民的な本においても使用が確認されている字体である。(7)

一作品のみにみられた字体は計22、具体的には次の通りである。

月氷竒縁

【お2】【於】【佐】【須2】【世】【堂】【亭】【那】

【耳2】【能2】【盤2】【遍】

弓張月

【希】【す】【せ2】【津】【奈3】【丹】【路】

八犬伝

【祢】【は】【流2】

【於】【須2】【世】【能2】【盤2】【奈3】【丹】【祢】は漢字に近い字体である。【す】【せ2】【丹】以外は、三作品に共通した字体より、比較的大きな字体である。しかし、黄表紙や合巻ほか多くの資料にみられる【す】や、作品によっては主体的に使用されることもある【せ2】(8)が含まれている。

表1に複数の種類のある字体の使用数と、使用割合を示した。二作品に共通する字体と、一作品のみにみられた字体には、○を付けている。これをみると、二作品に共通する字体と一作品のみにみられる字体36のうち35は読本三本に共通する字体の使用割合に対し、少なめである。そのうち5％未満の使用率の稀少字体というべき字体が22もある。例えば〈ア〉をみると、三作品とも【あ】を90％以上使用し、【阿】は月氷竒縁0・87％、弓張月8・49％と使用数が少ない。【あ】は主体的、【阿】は補助的な関係にあるのである。二作品に共通する字体、一作品のみにみられる字体は、ほぼ補助的な字体であると考えられる。ただし、月氷竒縁において〈オ〉の仮名は【お1】とは書形(9)の異なる【お2】が最も使用され、数量の上で主体的である。

また、〈オ〉〈ケ〉〈シ〉〈ツ〉〈ナ〉〈ニ〉〈ネ〉〈ノ〉〈ホ〉〈マ〉〈ル〉の字体の使用割合は、作品によって異なる場合がある。二作品に共通してみられた字体のうち【阿】【可2】【し2】【徒】【登】【に】【乃】【流1】は、作品ごとに使用割合がやや異なる。一作品のみにみられた字体のうち、月氷竒縁の【堂】【遍】、弓張月の【丹】【路】は、使用割合が10％以上あり、その本においてしばしば発現する字体である。特に月氷竒縁の〈タ〉は、【堂】が使用されているほか、【多】と【た】の使用割合がほぼ同等である。他の二作品では、【多】が95％以上、【た】が5％未満で、【多】が主体的

表１　字体の種類とその割合

仮名	字体	月氷		弓張月		八犬伝	
ア	あ	113	99.12%	97	91.50%	90	100.00%
	○阿	1	0.87%	9	8.49%	0	0.00%
オ	お１	17	34.00%	47	100.00%	32	100.00%
	○お２	32	64.00%	0	0.00%	0	0.00%
	○於	1	2.00%	0	0.00%	0	0.00%
カ	可１	155	87.57%	297	86.58%	245	86.57%
	か	21	11.86%	35	10.20%	38	13.42%
	○可２	1	0.56%	11	3.20%	0	0.00%
ケ	介	13	30.95%	52	66.66%	28	30.76%
	け	29	69.04%	20	25.64%	63	69.23%
	○希	0	0.00%	6	7.69%	0	0.00%
サ	さ	28	96.55%	89	100.00%	104	100.00%
	○佐	1	3.44%	0	0.00%	0	0.00%
シ	し１	238	84.09%	344	80.37%	298	77.80%
	志	45	15.90%	50	11.68%	30	7.83%
	○し２	0	0.00%	34	7.94%	55	14.36%
ス	春	106	74.12%	149	86.12%	128	74.41%
	須１	35	22.37%	15	8.67%	44	25.58%
	○須２	2	1.39%	0	0.00%	0	0.00%
	○す	0	0.00%	9	5.20%	0	0.00%
セ	せ１	28	96.55%	62	93.93%	92	100.00%
	○せ２	0	0.00%	4	6.06%	0	0.00%
	○世	1	3.44%	0	0.00%	0	0.00%
タ	多	48	42.85%	133	99.25%	117	95.12%
	た	46	41.07%	1	0.74%	6	4.87%
	○堂	18	16.07%	0	0.00%	0	0.00%
ツ	つ	20	39.21%	77	81.91%	35	54.68%
	川１	19	37.25%	3	3.19%	29	45.31%
	○川２	3	5.88%	6	6.38%	0	0.00%
	○徒	9	17.64%	7	7.44%	0	0.00%
	○津	0	0.00%	1	1.06%	0	0.00%
テ	天	177	59.59%	350	85.36%	288	76.59%
	て	115	38.72%	60	14.63%	88	23.40%
	○亭	5	1.68%	0	0.00%	0	0.00%
ト	と１	157	64.60%	300	84.26%	318	93.25%
	と２	79	32.51%	0	0.00%	0	0.00%
	と３	0	0.00%	55	15.44%	23	6.74%
	○登	7	2.88%	1	0.28%	0	0.00%
ナ	奈１	134	84.81%	21	10.14%	209	96.75%
	な	21	13.29%	83	40.09%	7	3.24%
	奈２	0	0.00%	101	48.79%	0	0.00%
	○奈３	0	0.00%	2	0.96%	0	0.00%
	○那	3	1.89%	0	0.00%	0	0.00%
ニ	尓１	39	11.71%	315	66.73%	301	57.11%
	尓２	274	82.28%	94	19.91%	226	42.88%
	○に	16	4.80%	1	0.21%	0	0.00%
	○丹	0	0.00%	61	12.92%	0	0.00%
	○耳１	1	0.30%	1	0.21%	0	0.00%
	○耳２	3	0.90%	0	0.00%	0	0.00%
ネ	年	1	12.50%	1	14.28%	6	46.15%
	ね	7	87.50%	6	85.71%	2	15.38%
	○祢	0	0.00%	0	0.00%	5	38.46%
ノ	の	287	83.67%	505	97.30%	362	96.02%
	能１	54	15.74%	14	2.69%	4	1.06%
	○乃	1	0.29%	0	0.00%	11	2.91%
	○能２	1	0.29%	0	0.00%	0	0.00%
ハ	八	167	75.90%	347	87.84%	357	90.60%
	者	36	16.36%	35	8.86%	28	7.10%
	盤１	16	7.27%	13	3.29%	8	2.03%
	○盤２	1	0.45%	0	0.00%	0	0.00%
	○は	0	0.00%	0	0.00%	1	0.25%
ヘ	へ	72	84.70%	180	100.00%	69	100.00%
	○遍	13	15.29%	0	0.00%	0	0.00%
ホ	保	16	84.21%	32	74.41%	12	50.00%
	本	3	15.78%	6	13.95%	8	33.33%
	○ほ	0	0.00%	5	11.62%	4	16.66%
マ	ま	30	60.00%	2	2.27%	6	8.95%
	末	8	16.00%	74	84.09%	59	88.05%
	満２	11	22.00%	4	4.54%	1	1.49%
	○満１	1	2.00%	0	0.00%	1	1.49%
ミ	三	26	92.85%	51	100.00%	40	90.90%
	○み	2	7.14%	0	0.00%	4	9.09%
ル	る２	71	56.80%	168	72.72%	161	68.22%
	る１	38	30.40%	58	25.10%	58	24.57%
	類	14	11.20%	1	0.43%	2	0.84%
	○累	2	1.60%	2	0.86%	0	0.00%
	○流１	0	0.00%	2	0.86%	12	5.08%
	○流２	0	0.00%	0	0.00%	3	1.27%
ロ	ろ	44	100.00%	23	71.87%	19	100.00%
	○路	0	0.00%	9	28.12%	0	0.00%

で、【た】は僅かしか使用されない。月氷竒縁の使用傾向は、他の二作品に対して特徴的といえる。

読本の二作品に共通する字体、一作品にのみにみられる字体は、使用割合が少なめな傾向が共通している。しかし、すべてが稀少字体というわけではない。本につき、字体の種類や、使用数に差異があり、個別性が窺われるのである。

3

まず先行研究において、使用位置に傾向があると指摘されている字体をみていく。

〈シ〉【し2】〈ツ〉【川2】【徒】〈マ〉【満1】

〈シ〉の【し2】[10]は、現行仮名字体に近い形をしており、前の文字の左横から起筆し、前の文字を囲むように書かれる字体である。弓張月と八犬伝において使用され、使用数が多めな真っ直ぐ線状に書かれる【し1】に対し、使用数の少ない字体である。次に、使用されている語を示す。

弓張月

【し1】〔344〕

語中—勇々しき1　久しき1　感じて1　油然として1　愀然として1　等91例

語末—しばし7　よし5　なし(無)7　なし(成)3　かへし1　おぼし1　等124例

助動詞—しかば8

助詞—し4　して5

【し2】〔34〕

語中—信々しき1　久しく1　感じあへり1　欣然として1

語末—狩くらし3　しばし2　よし2　なし(成)1　なし(無)1　おぼしかへし1　おぼし1　てらし1　懲らし1

助動詞—しかば3　しめ1

助詞—し6　して4

八犬伝

【し1】〔298〕

語中—おぼしき1　おぼしく1　しら$\boxed{し}$て1　ふかくして1　忽然として1　等113例

語末—なし(無)9　心やすし1　似げなし1　今はし1　鳴らし1　進らし1　等115例

助動詞—しかば13　じ5　べし6　等46例

助詞—し15　にして13　として1　かし1

【し2】〔55〕

語中—おぼしくて1　忽然として1　さゝして1　量らずして1　せわしく1　まなくして1

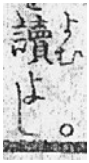
語末—なし(無)3　牽めぐらし1　立なほし1　読つくし1　おぼつかなし1　反らし1　とりかはし1　物体なし1　大人気なし1　いひがたし1　ふかくし1　測がたし1

立がたし1　見わたし1
助動詞―しかば12　じ1
助詞―し18　かし1

【し2】の使用箇所は語中末・付属語で、【し1】に準じる。【し1】で主に書かれ、時折【し2】が使用される。

弓張月の用例のうち9例は行末であり、行末の〈シ〉は必ず【し2】が使用されていた。

① 九丁オ（L3）
讀よ【し2】―



② 十二丁オ（L5～L6）
感【し2】―あへり

③ 二十丁オ（L10）
業をな【し2】―

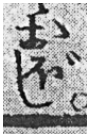
④ 廿五丁オ（L8）
な【し2】―

⑤ 廿六丁オ（L11）
しば【し2】―

⑥ 廿七丁ウ（L5）
も【し2】―

⑦ 廿九丁ウ（L3）
おぼしかへ【し2】―

⑧ 三十丁ウ（L3）
おぼ【し2】。―



⑨ 三十一丁オ（L10）
幾日もあらず【し2】―て

【し2】は直線的にスペースをとる【し1】より、結果的にスペースをとらずに済む。一語を同一行に収めるために、【し2】を用いて行末に押し込むことが可能である。[1] 用例のうち、③、⑤～⑨は行末までに一語を収めるため【し2】が用いられたとみられる。しかし、弓張月の①、②、④は、行末に【し1】一文字分を書き入れられる充分なスペースがあるのに関わらず、【し2】を書き入れている。スペースを省略することだけが目的なのではなく、行末には【し2】を用いようという意図がみられる。八犬伝では、行末の〈シ〉は9例中8例が【し1】、僅か1例のみ【し2】が使用されている（廿九丁オL7）。これは、スペースを省略するため書き入れたと考えられる例であった。行末の処理に、それぞれ違いがあること

が分かる。

〈ツ〉の月氷竒縁と弓張月にみられた【川2】[12]【徒】[13]の用例を、【つ】【川1】と共にみてみる。

月氷竒縁

【つ】〔20〕

語頭—つゝしみて1　つながれ1　つきて1

準語頭—名つく1　纏つき1

語中—おのづから2　みづから2　あづかり1　あづから1　あづけ1　うつして1　ゆづり1　わづふ1

助動詞—つ2　助詞—つゝ1

【川1】〔19〕

準語頭—縁づく1

語中—おのづから5　みづから2　いづち1　いつく1　しづまり1　とつてかへし1　まつはる1　まつはりし1　もつはら1

語末—まづ3　たつ1　まつ1

【川2】〔3〕

語中—あづく1　あづかる1　まづ1

【徒】〔9〕

語頭—つよく2　つげて1

準語頭—名づくる1　名つけ1　承つぎて1　こゝろづきて1

語中—いたづら2

弓張月

【つ】〔77〕

語頭—つきて5　つかふ1　つがひ1　ついゐて1　つくづく1　つけて1　つと1　つらなる1　つゞき1

準語頭—名づけ2　うちつれて1　痍つき1　餓つらめ1　追つき1　睨つめて1　手づから1　彫つけ1

語中—おのづから2　まつはりて2　まつはりし1　いづれ1　うつりて1　しづやか1　たてまつる1　まつり1　みづから1　めづらし1　よつ引1

語末—まづ3　思し召たつ2　たつ2　發つ1

助動詞—つる9　つ8　つれ3

【川1】〔3〕

語末—まづ1　まつしら1　もつはら1

【川2】〔6〕

語中—くつろげて1　なつかしみ1　よつ引て1

語末—よろづ1

助動詞—つ2

【徒】〔7〕

語頭—つかふる1　つがひ1　つかず1　つよく1　つく（嚼もつく）1

助動詞—つる1

助詞—つゝ1

【川2】は「川」の漢字に近い字体であり、語中末に使用されていた。【つ】【川1】の用例と同じような位置に使用されている。

【徒】は、月氷奇縁には語頭中、弓張月には語頭に使用されている。先行研究で指摘されている傾向と通じている。〈ツ〉の表記を豊富に行ったためと考えられる。

〈マ〉の【満1】は語末に使用されることの多い字体であり、[14] 月氷奇縁と八犬伝にみられた全2例においても、「いとま」（月氷奇縁廿三丁オ）、「仰さま」（八犬伝廿五丁ウ）と語末にみられた。より漢字に近い形の【満2】は三作品に共通して使用されており、読本においては【満2】が優勢で、【満1】は極めて少ない字体となっている。

4

〈ニ〉と〈ル〉の、二作品に共通した字体と、一作品にのみみられた字体の中は、用例や用法を同時に見た方がよいと考えられるものがあるため、ここでまとめてみることにする。

〈ニ〉【耳1】【に】（月氷奇縁・弓張月）【耳2】（月氷奇縁）【丹】（弓張月）

〈ル〉【累】（月氷奇縁・弓張月）【流1】（弓張月・八犬伝）【流2】（八犬伝）

まず〈ニ〉には、月氷奇縁と弓張月に五種類の字体が使用されていた。

弓張月のみにみられた【丹】は、〈ニ〉の12・92％を占める。前期読本の「雨月物語」[15] では全体の約2％であるので、弓張月は【丹】がやや多くみられるといえる。使用された語を、【尓1】【尓2】と共に示す。

弓張月

【尓1】〔315〕
語末—既に4　為に3　潜に3　遙に2　大に2　いかに2
　直に1　等36例
助詞—に265　には3　にも3　にや1　だに1

【尓2】〔94〕
語中—いにしへ1
語末—遂に1　故に1　他に1　僅に1　誠に1　忽地に1
　憂に1　さらに1
助詞—に47　にて15　にして10　にも7　には6　にぞ4　にしも1　にや1

【丹】〔61〕
語中—いにしへ1
語末—遂に2　為に1　既に1　直に1　嬉し氣に1　軽やかに1　健に1　等11例
助詞—に22　にも13　には5　にて4　にや3　にして1

【丹】が使われている語は、三本に共通する字体である【尓1】【尓2】とほぼ同じであることが分かる。使用箇所は主に助詞ニや副詞の語末である。

現行仮名字体に近い【に】は、月氷奇縁には16例みられるが、助詞ニ15例、「ゆゑに」1例、弓張月では、助詞ニ1例がみられる。

【耳1】は月氷奇縁、弓張月ともに僅か1例のみである。いずれも行末に使用されている。また、【耳1】に比して画数の多い【耳2】は、月氷奇縁に3例みられ、すべて行末にあたる。月氷奇縁の【に】も助詞ニ15例のうち8例は行末である。

月氷奇縁

八丁ウ（L9）　身【に】一
十一丁オ（L2）　密【耳1】一
十一丁ウ（L3）　一室【に】一
十四丁オ（L1）　廉直【に】一
（L5）　戯【耳2】一
（L11）　杖【に】一
十五丁ウ（L8）　見る【に】一
十八丁オ（L11）　駈【に】一
二十丁オ（L5）　遂【に】一
廿三丁ウ（L7）　烏夜【に】一
（L8）　粟津【耳2】一
廿四丁オ（L11）　遂【耳2】一

弓張月

十三丁オ（L11）　爲義【耳1】一

月氷奇縁の行末には、【尓2】がくる場合も13例ある。行末にさまざまな字体がみられるようにしていたと考えられる。弓張月も同様に、【尓1】9、【尓2】4、【丹】4と行末に四種類の字体が出現する。

これらの字体には、縦幅に違いがある。【耳1】【耳2】の縦幅は、[16] 月氷奇縁の【耳1】(1例)は八皿、【耳2】(3例)は七～八皿、弓張月の【耳1】(1例)は六皿である。行末における他の字体は、月氷奇縁で【尓2】(13例)三～五皿、【に】(7例)四～六皿、弓張月は【尓1】(9例)二～三皿、【尓2】(4例)二～四皿、【丹】(4例)三～四皿と【尓1】【尓2】【に】【丹】は、「耳」が字母の字体より、平均して小さめに書かれる。行末にどれほどのスペースが余るかで、大きさの合った字体を選べたと考えられる。【耳1】【耳2】が行末のみに用いられるのは、行末のスペースを埋める効果があったためと考えられる。

〈ル〉の月氷奇縁、弓張月に使用されていた【累】は、月氷奇縁、弓張月ともに2例のみ使用され、月氷は「はしる」「給へる」(十二丁オL8)、弓張月は「綴る」(七ノ下丁ウL8)、「よる」が用例である。

月氷奇縁　十六丁オ

（L8）　柄杓おのづから躍出て庖湢をはし【る1】。者甚麼とおどろき看ば。盆鍋　俎のたぐひこと〳〵く板架をはなれ。或は梁の上に附。或

（L10）　は桟板をはし【累】。

弓張月　十三丁オ

（L10～11）　よ一【累】

月氷奇縁「はしる」は、怪奇現象が発生して柄杓や盆が庖湢や桟板を走る場面にあたり、二行前に「はしる」の語がある。このため、

近接する同じことばの同じ字体の反復を避けたと考えられる。

弓張月の【累】の使用は、行頭であることが関係しているとみられる。本稿では検討に加えていないが、〈リ〉の仮名が行頭にくる場合は、「居れ一【里】」（十四丁オL8～L9）、「茵一【里】て」（二十丁オL8～L9）、「勦一【里】」（三十一丁オL9～L10）と必ず【里】が使用される。〈ハ〉の場合も、助詞ハ、バに限ると、行頭の5例中4例に【盤1】がきている。弓張月においては行頭の字体に気を配ったかと考えられる。[17]

【流1】は弓張月で2（0・86％）、八犬伝では12（5・08％）の使用数であった。弓張月の2例は、「ける」（十七丁オL11）、「遮る」（廿五丁オL8）の語である。

八犬伝には書形違いの【流2】も3例使用されており、語末にさまざまな〈ル〉の字体がみられる。

八犬伝

【る1】〔58〕

語末—落る3　かゝる2　象る2　入る2　捩断る1　廻翔る1

等47例（「漢字＋【る1】39」）

助動詞—たる1　ける2　らる2

【る2】〔161〕

語末—見る5　大なる2　入る1　象る1　送る1　見かへる1

等69例（「漢字＋【る2】18」）

助動詞—たる33　なる25　ざる12　ける6　つる3　らる1

【流1】〔12〕

語末—送る1　立る1　掛跨る1　潜る1　識る1　向上る1

多かる1　しかる1　はやる1

助動詞—たる2　ざる1

【流2】〔3〕

語末—遠離る1　含る1　立かへる1

動詞や助動詞の終止形や連体形は、文中に頻繁に使われ、変化をつけるため〈ル〉の字体が様々に使われたと考えられる。

5

先に述べた以外の、二作品に共通した字体の用例をみてみよう。

〈ア〉の【阿】は、月氷奇縁では次の1例のみである。

十三丁ウ

（L9）女子のしるところに【あ】ら【須1】。渠卵を偸むに【あ】ら【春】は。かならず破碎るもの

（L10）ならん。そのこと分明ならずして免は法に【阿】ら【須1】。

このように、三回「あらず」が繰り返されている箇所であり、【春】【須1】とも組み合わされて、同じ語に同じ字体が使用されるのを避けたとみられる。

弓張月の9例は、すべて語頭であり、用例は【あ】でも書かれる語である。

【あ】あり20　ある10　ありて8　あれ1　あらそひし1　等101

例

【阿】あり3　ある3　ありて1　あれ1　あらそひし1

【阿】で書かれた語のうち3例は、対句の同じ語に同じ字体が使用されるのを避けたもの、近接したため同字体を避けたと考えられる箇所で使用されている。

十七丁オ（L3）智【あ】るものは争は【春】。能【阿】るものは誇ら【す】。

廿六丁オ（L4）【あ】しかりつるも。この事【阿】るべき一

（L7）【あ】まり【阿】り。

しかし、二十丁ウには「あり」「あらず」が同じ行にあるが、どちらも【あ】で書かれており、変化をつける用法が徹底されているわけではない。

〈カ〉の【可2】は月氷奇縁で十丁オL1の短歌「おもへども思ひも【可2】ねつあし引の山どりの尾のながきこのよを」においてのみ使用されている。

弓張月の【可2】11例は、自立語の語中末か付属語に使われる。【可1】の用例と示してみる。

【可1】〔297〕

語中—やがて8　いかなる2　しかば13　賢かる1　快からず1　等114例

語末—軽やか1　しづやか1　わが16

助詞—が81　ながら5　等124例

【可2】〔11〕

語中—やがて4　いかなる1　しかば1　甚しかり1

語末—信やか1

助詞—が2　ながら1

【可2】は二画で書き終わるため、複雑な形とはいえないが、漢字の名残がある字体である。【可1】と使用位置が変わらないこともあり、変化をつけるために使用されたとみられる。

〈ト〉の【登】は月氷奇縁で7例、弓張月で1例みられ、その8例のうち7例は助詞ト、月氷奇縁に「もとめ」と自立語語中に1例みられた。【登】の助詞ト8のうち、月氷の4例と弓張月の1例は行末にあたる。

月氷奇縁

十二丁オ（L6）打ん【登】一する

十三丁ウ（L3）しらず〳〵【登】一あらがへば（腰元さざ浪の台詞）

廿二丁ウ（L3）喫し給へ【登】一いふ（盗賊石見太郎の台詞）

廿五丁ウ（L3）卒こなたへ【登】一前に立（怨霊さざ浪の台詞）

弓張月

二十丁ウ（L2〜L3）打殺さず【登】一いふ

【登】が行末にあたるのも、行末のスペースの余り方が関係していると考えられる。【登】は【と1】【と2】【と3】に比して縦幅のある字体である。助詞トのあとに自立語を書き入れるには狭く、しかし助詞トを【と1】【と2】【と3】で書くには広すぎると意識され、【登】で行末を埋めたと考えられる。また、月氷奇縁の用例のうち、十三丁ウ、廿二丁ウ、廿五丁ウのものは、引用の助詞トである。トが行末と重なるのは右の3例のみであり、目立つ字体を用

いたとも考えられる。

〈ノ〉の【乃】は月氷竒縁で1（0・29％）、八犬伝で11（2・91％）の使用数であり、すべて助詞「の」を書いている。月氷竒縁では十五丁ウL1に使用され、使用理由は窺えない。八犬伝では、すべて【乃】は行末近くに使用されている。

八犬伝

十一丁オ（L1）馬【乃】一
十一丁ウ（L7）馬【乃】一
十二丁オ（L8）五枚冑【乃】鍬一形
十二丁ウ（L2）大勢【乃】真一中
十四丁ウ（L5）晋【乃】文一公
十六丁オ（L6）聖人【乃】無一欲
（L8）法華経【乃】一
十九丁オ（L10）舊【乃】一
廿五丁オ（L6）落馬【乃】一
廿六丁オ（L2）馬【乃】一
（L8）案内【乃】山一阪

助詞「の」の240例のうち、【の】で書かれたものは229例、行末に【の】があたるのはそのうち19例である。【乃】は【の】と同じほどの大きさの字体もあるが、平均的にやや大きめである。【の】と【乃】は〈ノ〉の仮名に変化をつけるために使われ、かつ、行末を埋める効果があったと考えられる。

〈ホ〉の【ほ】は、【保】に比して現行仮名字体に近いといえる。読本三本を通して、〈ホ〉の仮名は、『保』が字母の字体が優勢だが、近世の様々な板本で、当時〈ホ〉の仮名は【ほ】より【本】が優勢だったことが分かっている。[18]【ほ】の用例を次に示す。

弓張月　語頭―ほとり4　ほどこし1

八犬伝　語頭―ほとり2　語中―おぼしく1　のぼしかゝつて1

このように、【ほ】は非語末に使用されている。なお、弓張月では【本】が「ほとり」1例、「おぼし」「のぼし」等語中5例、【保】が「おぼして」「もよほして」等語中18例、「なほ」語末14例に使用される。また、八犬伝では【本】は「ほゐ」語頭1例、「おぼし」「なほし」等語中4例、「なほ」「処得がほ」語末2例、【保】は「おぼつかなし」「なほりて」等語中7例、「なほ」語末5例にみられる。

〈ミ〉の【み】の用例を【三】と共に示す。

月氷竒縁

【三】〔26〕

語頭―みづから4　みな2　みのらず1　みだれて1
語中―このみて2　こみ〳〵1　あはれみて1　うらみん1　かしこみて1　つゝしみて1
語末―すゝみ1　ゆるみ1　掴み1　あはれみ1　哀み1　あやしみ1　かへりみ1
助動詞―べみ1　助詞―のみ2

【み】〔2〕

語頭―みたず1　みだれて1

八犬伝

【三】〔40〕

語頭—みな3

語中—進みし2　うち笑みて2　すゝみし1　挟みて1　あざみ誇て1　あざみ笑ひ1　すゝみ出1

語末—好み10　進み3　すゝみ1　淪み1　生み1　推尊み1

助詞—のみ11

【み】〔4〕

語頭—みづから2　みな2

【み】は、月氷奇縁においては、語頭に時折使用される字体であり、八犬伝では、語頭に使用される傾向のある字体といえる。

以上、二作品に共通する字体をみてきた。字面に様々な変化をつけたとみられるものが多く、また、字体の大きさを利用したと考えられる行末の用法もみられ、一概に変化をつけることだけが字体の出現理由ではないことが分かる。

6

次に、一作品のみにみられた字体を検討する。各本においてどのように使われていたのかみていきたい。

6—1

まず、月氷奇縁の字体を検証する。〈オ〉には、最終画の点から文字を突き抜けるようにして、下の仮名に連綿する形をしている【お2】、漢字の形に近い書形の【於】がみられた。三作品にみられた【お1】とともに、使用された語を示す。

【お1】〔17〕

語頭—おそれ2　おのづから1　おどろき1　おどろく1　おさめ1　おそろし1　おとろへ1　おなじ1　おなじく1　おの〳〵1　おのれ1　おふて1　おほし1

準語頭—入おき1

【お2】〔32〕

語頭—おのづから6　おどろき4　おもふ3　おもひ3　おもへ3　おもはず1　おく1　おのびて1　おぼえし1　おほく1　おり立1

【於】〔1〕

語頭—おもふ1

【お1】で書かれた語は延べ数13、【お2】で書かれた語は延べ数11である。【お2】の字体の使用割合は多いが、決まった語に使用されていることが分かる。用例をみると、特に、「おもふ」「おもは(ず)」「おもひ」「おもへ」と「思ふ」の語14例に【お2】が使用されている。「おもふ」の【お2】から繋がる〈モ〉の字体はすべて上の字から連綿する書形の【毛1】である。下の字に連綿する書形である【お2】は一語を連綿によりひとまとまりにしやすい字体であるといえる。

【於】が使用されていたのは次の箇所である。

十七丁オ（L2～3）【於】—【毛1】【ふ】あたり

「おもふ」の「お」のみを残して改行されている。ほかの「おもふ」の類14例はさきほど述べたようにすべて【お2】であり、下に続く【毛1】と連綿される形で表記されている。連綿が途切れたことから、通用の字体とは異なる字体にしたとみられる。

〈サ〉の【佐】の用例は僅か1例、怨霊となった腰元さざ浪の「さらば縛（いましめ）を解（とく）べし」という台詞の冒頭に使用されていた。[19]

廿五丁ウ（L1）一【佐】らは

〈ス〉の【須2】は漢字に近い形をしている。僅か2例しかみられなかった。[20]

十五丁オ（L1）たのしま【須2】。一

廿六丁（L4）おもは【須2】一

行末のため、用いられたかと考えられる。

〈セ〉の【世】は漢字の近い書形の字体である。[21]

十二丁ウ（L11）引出（ひきいだ）【世】り

「せり」は、右のほかに「せり」2例「もてせり」「寓居（ぐうきょ）せり」の4例が現行仮名字体に近い【せ1】で書かれている。

〈タ〉の字体三種類ついては、月氷奇縁にのみ、特徴がみられる。他の二作品は、【多】は95％以上であり、【た】は僅かである。しかし、月氷奇縁では、【多】42・85％、【た】41・07％、【堂】16・07％と、【多】【た】はほぼ同等に使用されている上に【堂】がしばしば文章中にみられる。三つの字体の位置を表2に示す。【た】は自立語語頭、付属語語頭に偏っており、【多】【堂】は自立語語頭・語中、付属語語頭に多いと分かる。

月氷奇縁のみにみられた【堂】[22]の用例をみてみよう。

【堂】

語頭―たしみ1　準語頭―一たび1

語中―いたり4　いたる1　いたれば1　いたゞき1　うたがひ1　みたず1　みだれて1　ふたゝび1　のたまふ1

助動詞―たり2　たる2

右の用例の中で、〈イ〉から【堂】に続く語は、すべて漢字に近い【以】から連綿している。また、助動詞「たる」は必ず【類】の字体と連綿している。通用される【い】や【る1】【る2】に比して、複雑な字体と組み合わされて使用される。表3は助動詞タリの「たり」「たる」（この二つの

表3　助動詞タリに用いられた字体

	【た】	【多】	【堂】
たり	16	6	2
たる	6	2	2

表2　〈タ〉の字体使用分布

付属語	語末	語中	準語頭	語頭		
11	7	27	0	3	多［48］	月氷奇縁
24	0	1	1	20	た［46］	
4	0	12	1	1	堂［18］	

活用形のみがみられた）に使用された字体を示したものである。「たり」「たる」は、【た】【多】がそれぞれ使用され、さまざまな書き方がみられるようになっている。三つの字体の割合がある程度みられるのは、語に様々な表記が行われているからである。[23] 月氷竒縁では〈タ〉の三字体を使用して変化をつけたとみられる。

〈テ〉の【亭】[24]は僅か5例、用例は次の通りである。

十丁ウ（L4）　釣し【亭】一

十八丁ウ

（L1）夫剣は陽物にし【て】威あるものなり。鬼は陰にし【天】形なき

（L2）ものなり形なきものをもて威あるものに遇是故にその妖を銷鑠

（L3）して勝ことあたはざらしむ故に鬼は剣を畏る。鏡も亦陽物にし【天】

（L4）至明なるものなり。精は亦陰物にし【亭】偽変なるものなり。偽を以

（L5）至明に當る。このゆゑにその形を暴著して逃るゝこと能ざらしむ

（L6）ゆゑに精は鏡を畏る。むかし抱朴子その畧をいへり。看に後三日

（L7）にし【亭】哭あり。百日にし【天】二物をうしなひ。廿五年を経て禍

（L8）はじめて消除し。又一年にし【天】大に福あらん。

二十丁オ（L6）　一疑し【亭】

二十丁ウ（L9）　一ありと【亭】

十八丁ウには「陽物」「陰物」、「三日」「百日」「一年」といった反対語や類似の語が「にして」で繰り返されるため、【て】【天】【亭】を使用し、同字体の反復を避けたと考えられる。あとの3例の使用理由は不明というほかないが、行末あるいは行頭に近いという点が指摘できる。

〈ナ〉の【那】の用例を語別に示す。該当語に【奈1】が使用されている場合も合わせて示しておく。

はなはだ　延べ数3

十五丁ウ（L7）は【奈1】はだ

十七丁オ（L5）は【奈1】はだし

廿二丁ウ（L1）は【那】はだ

むなしく　延べ数2

十九丁オ（L10）む【那】しく

二十丁オ（L4）む【奈1】しく

すなはち　延べ数6

九丁オ（L10）す【奈1】はち

十一丁オ（L10）す【奈1】はち

十七丁ウ（L11）す【奈1】はち

十八丁オ（L8）す【奈1】はち

廿四丁ウ（L6）す【奈1】はち

廿五丁（L4～5）す【那】一はち

「はなはだ」「むなしく」は数が2～3例と少ないので、変化をつけるため使用されたかと推測することしかできない。「すなはち」は、6例中5例は【奈1】であり【那】の1例のみ直後で改行されている。1例のみなので確かなことはいえないが、語の途中であることを注意するために特別な字体を用いた可能性もある。

〈ノ〉では【能1】よりも漢字の形を残している【能2】が使用されていた。使用箇所は語頭で、「のたまふ」に用いられる。「のたまふ」の用例を、【の】で書かれたものと示す。

九丁オ　（L1）【の】【多1】【満2】はく
　　（L6）【の】【堂】【末1】ふ
十一丁オ（L5）【能2】【多1】【末1】はく

【能2】をただ1例使用したのは偶然かもしれないが、3例の「のたまふ」の字体の組み合わせはすべて異なるものとなっている。

〈ハ〉の【盤2】は漢字の形により近く、【盤1】より更に画数が多い字体である。月氷竒縁にただ1例、行末の助詞「は」に使用される。

十八丁オ（L3）こひねがはく【盤2】一

行末にみられる【八】（6例）、【盤1】（2例）に対し、【盤2】は縦長であるので、やはり、スペースが関係あるかとみられる。

〈ヘ〉の【遍】は助動詞「べし」「べき」「べみ」にのみ使用されていた。「べし」「べき」は【へ】でも書かれることもあり、用例数は次の通りである。

【へ】　べし11　べき2　べからず4　べかり1　給へ10　等32例
【遍】　べし7　べき5　べみ1

助動詞「べし」の活用形「べかり」「べから」や、左には挙げていないが「いへども」（8例）「かへす」（1例）の語や、三文字以上の語は、すべて【へ】で書かれる。平たい【へ】に比して【遍】は画数が多く、大きめな字体である。特定の語に混ぜて、視覚的効果を狙ったものと考えられる。

6―2

弓張月のみにみられた字体は、六種類あった。

〈ケ〉の【希】は大きめな字体である。概ね【介】の約一・五倍ほどであることが多い。〈ケ〉の三つの字体【希】【介】【け】の自立語の用例は次の通りである。

【介】
語頭―けふ3
語中―なけれ4　ちかけれ1　深（ふか）けれ1　有がたけれ1

【け】
語頭―けふ2
語中―かけて2　かけず1　しげき1　つけて1　うけ引て1
語末―名（な）づけ2　退（しりぞ）け2　防（ふせ）げ1　似（に）げ1　急（いそ）げ1　あけ1

【希】
語中―くつろげて1

この【希】の「くつろげて」（廿五丁L3）の1例では〈ツ〉に漢字に近い字体の【川2】を使用しているので、複雑な字体が二字入っ

ている。

表4に示した通り、「けり」「けん」「べけれ」と助動詞の〈ケ〉の多くが【介】で書かれているが、「けり」1例、「ける」4例が【希】で書かれている。大きめな字体を用い、時折変化をつけたものと考えられる。

〈ス〉の【す】は、近世の本にはよくみられる字体だが、今回の調査では弓張月にのみ使用されていた。三本に共通してみられた【春】【須1】の用例とともにみる。

【春】〔149〕

語頭—する5　すゝめ2　すゝみ2　すは2　すべて1　等16例

準語頭—脱すてゝ1　一トすじ1

語中—まゐらすれ3　まゐらする2　仰する1　見する1　ます〳〵1　等25例

語末—給はず6　怕れず2（打消「ず」75例）　まゐらす1　等105例

【須1】〔15〕

語中—ます〳〵2

表4　〈ケ〉の助動詞

字体＼用例	けり	ける	けれ	けん	けめ	べけれ
弓張月 介 [46/52]	9	19	8	5	0	1
弓張月 け [2/20]	0	1	0	0	1	0
弓張月 希 [5/6]	1	4	0	0	0	0

語末—べからず1　せず1（打消「ず」6例）　おはします2　かならず2　等13例

【す】〔9〕

語頭—する4　す1

語中—さすらはず1　寇する1　震する1

語末—放さず1　誇らず1

【す】は自立語のどこにでも使用され、汎用性が高いが、使用数は最も少ない。用例をみてみると、「さすらはず」は、

廿二丁ウ（L5）さ【す】らは【春】

〈ス〉が二度出てくるときに字体を変えるために使用され、

十七丁オ

（L3）智【あ】るものは爭は【春】。能【阿】るものは誇ら【す】

対句で助動詞「ず」が同じ字体になるのを避けており、変化をつける用法がみられる。

また、「する」が行末にある2例は、スペースの省略のためと考えられる。

廿二丁ウ（L2）家とする一

廿七丁ウ（L2）震する一

【す】は最終画で左にはらうため、【る2】と連綿することによってスペースを省略できる。【春】の場合、最終画で右側にはらうので、【す】のように【る2】と密着して書くことはできない。やや狭くなった行末のスペースに、【す】で書かれた「する」を用いたと考えられる。巻之一では右の2例のみだが、巻之三の十八丁オL1

に「御覧ずる」が行末に書かれ、やはり連綿でスペースを省略した形で書き入れられていた。

〈セ〉の【せ2】はカタカナの「セ」とほとんど同じ形をした字体である。現行仮名字体に近い【せ1】が使用される中で、僅か4例、使用されている。

【せ1】〔62〕

語頭―せず3　せり2　せん2　せじ1　せざり1　せらる1　せん（すべなく）1

語中―申せし1　落せし1　まゐらせ給ふ1　労せずして1　おはせし1　等31例

語末―まゐらせ7　合せ1　申せ1　搦取せ1　縫留させ1　殺させ1　等20例

【せ2】〔4〕

七ノ下丁ウ（L8）載【せ2】て一

十丁ウ（L8）問【せ2】給ふ

十一丁（L3）おり居一さ【せ2】給ふ

十二丁（L6）欲【せ2】ば

【せ2】は【せ1】より小さめに書かれるので、その点を生かした用法もあるとみられるが、確定はしにくい。

〈ツ〉には【津】が僅か1例みられた。[25]

廿五丁ウ（L8）嚼【津】き【川2】蟒一蛇

この箇所のみ使用されていた理由は不明だが、漢字に近い書形の【川2】や画数の多い漢字が近接してみられた。

〈ナ〉の【奈3】は僅か2例である。

十二丁オ（L1）夜【奈3】〳〵

十四丁オ（L7）【奈3】ほ

「なほ」は延べ14例みられ、そのうち、使用数が最も多い【奈2】で書かれる例は12例、【な】で書かれたものは1例みられる。頻出語に変化をつけたものと考えられる。「夜な〳〵」は、上が漢字であることと、【奈3】が漢字に近い書形であることが関係あるかと推測される。

〈ロ〉の【路】について、【ろ】と共に使用語を示す。

【ろ】〔23〕

語中―よろこび1　よろこびて1　おどろ|おどろしく1　よろづ1　こゝろみ1　ころして1　くろみ1　くつろげて1　ひろく1　もろとも1　矢ごろ1　射ころす1

語末―こゝろ5　ところ4

【路】〔9〕

語中―よろこび1　おどろおどろ|しく1

語末―こゝろ4　ころ1　もろ1　人こゝろ1

【路】は語中末に使用され、【ろ】と使用位置が変わらない。用例のうち「よろこび」「こゝろ」は【ろ】でも書かれる語であり、「おどろおどろしく」ははじめの「おどろ」は【ろ】で書き、二回目の「おどろ」は【路】に変えている。

「こゝろ」は【ろ】で5例、【路】で4例書かれている。【ろ】で書かれた「こゝろ」は九丁オ、十七丁ウ、十九丁ウ（2）、廿四丁オ

(「御こゝろ」)、【路】で書かれた「こゝろ」は十八丁オ(「人こゝろ」)、廿一丁オ、廿二丁ウ、廿三丁ウ、廿五丁ウに分散している。若干【ろ】が使用されたものより【路】で書かれた「こゝろ」が後の丁に分布しているようである。一部の頻出語に変化をもたせたものとみられる。

6―3

最後に、八犬伝のみの字体をみてみる。

〈ネ〉で【祢】は、【ね】に比して漢字に近い字体である。【ね】【年】とともに使用語を示す。

【祢】助動詞―ね5
【ね】助動詞―ね2
【年】助動詞―ね2

語中―かねて1　測(はかり)かねて1　回答(いらへ)かねて1　死(し)ねや1

このように助動詞の「ね」は、【祢】以外にも、【ね】【年】で書かれることがある。【年】では「候はねば」「候はねども」のみに使用される。【祢】は【ね】とともに、「あらね」(4例)、「憑(たのも)しからね」「進(まゐ)らしね」「認(みと)めね」に使われている。

〈ハ〉の【は】は現行仮名字体に近い字体である。用例は次の通り。

廿三丁オ(L2)　件(くだん)の事(こと)【八】【は】じめより。

助詞ハの直後に語頭の〈ハ〉の字体が続いているのは右の例のみであり、通常より目立つ字体を用いたかと考えられる。なお、「はじめ」の語は4例あり、他の3例は【者】で書かれている。

7

二作品に共通する字体、一作品のみにみられた字体は、主として使用される字体に対し、使用数が少ないものがほとんどであり、各本巻之一全体の仮名使用数に対し僅かな場合が多かった。しかし、二作品に共通した字体は、各本によって使用割合が若干異なる字体があり、一作品のみにみられた字体にしても、使用頻度は個別的であった。

二作品にみられた字体については、【し2】【徒】【川2】【満1】など先行研究で既に同じような用法が指摘されている字体があり、読本でも同様に使用されていた。また、語の特定の位置に使用される字体とみられるもの(【ほ】【み】)も僅かだがあった。ただし、近接する同じ語、頻出する語、対句の同じ語の字体を変えるために、二作品に共通する字体、一作品のみにみられた字体が使用される傾向があり、多くの字体はそうした字面に変化をつけるための装飾的なものと考えられるといえよう。

一作品のみにみられた字体は、大きめだったり、画数が多く複雑な字体が多かった。こうした字体は、文章中にまれに使用されるだけでも、存在感があると考えられる。使用意図が窺えないものばかりであったが、「常用とは異なる字体」が使用されている文字列は、記憶に残りやすく、読み手がその表記を目印に特定の文章に戻りやすい、という索引のような役割があるのではないか、と考察したが、

立証するのは難しく、推測するに留まる。しかし、音声や語だけでなく、その本の文章全体において、目立つ字体がどのような効果を持つのかは、今後も検討に入れるべきであると考える。

一方、字体の大きさを利用して、行末に中途半端な空間ができないようにしたと考えられるものもあった。【登】や【耳1】は月氷奇縁、弓張月に行末を埋める用法が共通し、八犬伝の【乃】が行末にみられるのも同様かと考えられる。弓張月に【し2】や【す】がスペースを省略するために使用されたかとみられる例もみられた。こうした行末の処理の理由として、匡郭で囲まれている点が挙げられる。行末に余白ができることを避ける、一続きの文が行内に収まるようにしたと考えられる。以上による使われ方は、本によっては美的に使用される場合と、共通する場合もある。

読本の仮名字体の使用に関しては、装飾性の強さや、行末では字体の選択が意識されている点などが窺えた。多くの目に触れる出版物としての表記の分かりやすさ（例えば、行末の処理）と、読本に相応しい表記の選択（例えば、変化をつける用字）が、仮名字体の使用に混ざり合っていたと考えられるのである。

（本稿は、平成二十七年十月二十四日第135回表現学会東京例会にて発表した『馬琴読本における変体仮名の運用法』の内容を、字体の種類を中心に、用例をできる限り示して分析する主旨に改変したものである。）

注1　市地（二〇一五）により、読本には草双紙類に比して字体の種類数が多めであるほか、同じ仮名の字体が複数使用されていても用法が本によって異なったり、【連】（注（7）を参照）といった草双紙類には滅多に使用されない字体の使用が認められたりと、総じて平仮名字体のバリエーションが豊かであることが分かった。

2　『月氷奇縁』は国文学研究資料館『日本古典籍総合目録データベース』http://base1.nijl.ac.jp/infolib/meta_pub/KTGSearch.cgi（二〇一五年十一月三十日参照）では享和三年版があるとされ、馬琴の『近世物之本江戸作者部類』（徳田武校注、岩波書店、二〇一四年）P212では「印行の年」が文化元年となっており、本稿で調査資料として用いた版の奥付では文化二年と記されと、刊行年に揺れがある。本稿では調査資料の刊記と収録書の解題に基づき、文化二年の刊行と判断する。なお、成立年は刊記と諸研究において享和三年で一致している。『椿説弓張月』『南総里見八犬伝』は刊記と諸研究での刊行年に食い違いはないようである。

3　『椿説弓張月』『南総里見八犬伝』の仮名字体の特徴（複製）月氷奇縁』は『馬琴中編読本集成　第一巻』（鈴木重三・徳田武編、汲古書院、一九九六年）、『椿説弓張月前篇』は『影印椿説弓張月前篇』（板坂則子編集、笠間書院、一九九六年）、『南総里見八犬伝肇輯』は（国立国会図書館所蔵、国立国会図書館デジタルコレクション、http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2546338?tocOpened=1（二〇一五年十一月三十日参照））を資料とした。

4　市地（二〇一三）において、『椿説弓張月』と『行平鍋須磨酒宴』の字母の比較を行い、読本に字母の種類数が多いことが分かっている。

5　市地（二〇一五）を参照すると、例えば、〈ニ〉の【尓1】【尓2】の使用数をみると、月氷奇縁【尓1】39【尓2】274（約12・46％／約87・53％）、弓張月【尓1】315【尓2】94（約77・01％／約22・98％）、【尓1】301【尓2】226（約57・11％／約42・88％）とそれぞれ使用割合が異なり、月氷奇縁では自立語・付属語（助詞「に」を中心とする）ともに主に【尓2】が用いられるが、弓張月では【尓2】は自立語に使用される一方で【尓1】はほぼ付属語専用であり、八犬伝では自立語は【尓2】でのみ書かれるものの使用数は拮抗していた。

6　本稿で個別の字体をさす際は、【　】に該当の現行仮名字体、あるいは

その代替として字母である漢字を入れて示す（例：【あ】【阿】）。また、同じ字母で書き順や画数の異なる字体がある場合は、アラビア数字を振って区別する（【く1】【く2】、【可1】【可2】）。また、抽象的な単位として仮名を指す際は、〈　〉に該当する仮名をカタカナで入れて表す。

7　【し1】【徒】【川2】【満1】は、『金銀先生再寝夢』（内田（一九九八a））、『大悲千禄本』（久保田（二〇〇二））、一九の黄表紙（矢野（一九九〇））、赤本（久保田（一九九四））、合巻『金毘羅船利生纜』（内田（二〇〇〇））、また、滑稽本『浮世風呂』（久保田（一九九七））に使用が確認でき、人情本『春色梅兒譽美』（玉村（一九九四））にも【徒】【満1】が使用されている。

8　恋川春町の洒落本『無頼通説法』、黄表紙『金銀先生再寝夢』（内田（一九九八a））『無益委記』（久保田（一九九六））では【せ2】が使用数の上で優勢である。そのほか、洒落本『傾城買二筋道』（久保田（二〇〇九））、滑稽本『浮世風呂』（久保田（一九九七））、一九の黄表紙類（矢野（一九九〇））に使用されることがある。

9　本稿では、崩しの度合い、曲折・転折による筆の運びを「書形」と呼ぶ。

10　一九の黄表紙類（矢野（一九九〇））では自立語語中尾および付属語、黄表紙『大悲千禄本』（久保田（二〇〇二））では自立語の語末、黄表紙『金銀先生再寝夢』、洒落本『無頼通説法』（内田（一九九八a））にて非語頭、洒落本『傾城買二筋道』（久保田（二〇〇九））において語末かつ行末の箇所、『浮世風呂』（久保田（一九九七））では語中尾の使用が指摘されている。

11　久保田（一九九七）P82～83において、行末に書き入れる余地の少ない箇所に書けることが指摘されている。

12　洒落本『無頼通説法』、黄表紙『金銀先生再寝夢』（内田（一九九八a））で非語頭、人情本『春色梅兒譽美』（玉村（一九九四））では【川1】とともに、促音に使用される割合が高いことが指摘されている。

13　内田（一九九八a）、久保田（一九九七）（二〇〇九）にて語頭への使用が指摘されている。

14　内田（一九九八a）、久保田（一九九五b）（一九九六）（一九九七）（二〇〇九）、玉村（一九九四）を参照。

15　前田（一九七一）にて『雨月物語』の平仮名字母の使用割合が示されている。

16　仮名に定規を当てて測った。本稿では月氷竒縁と弓張月の調査資料に影印本を用いており、編集により縮小されている場合があるため、計測した長さはあくまで参考である。以降、字体の長さを計測した場合にすべて同じことがいえる。

17　植（一九七九）に定家の写本の用字について「行頭にどっしりして安定感のある華やかな字体が使用される」という指摘がある。

18　浜田（一九七九）P9

19　『金毘羅船利生纜』自筆稿本（内田（二〇〇〇））、『南総里見八犬伝』自筆稿本（大島（二〇〇〇））、に使用されていたことから、馬琴が好んで使っていた可能性がある。

20　恋川春町の洒落本『無頼通説法』（内田（一九九八a））では4例みられ、語尾・文節末に使用されていた。

21　仮名草子整版本『因果物語』『東海道名所記』（久保田（一九九四）（一九九五a））に用例が報告されている。

22　【堂】は『可笑記』『因果物語』『東海道名所記』（久保田（一九九四））、洒落本『傾城買二筋道』（久保田（二〇〇九））において、語頭に使用されると指摘がある。

23　なお、こうした変化をつける用法は、久保田（一九九四）において仮名草子に【堂】が使用される際にも指摘されている。

24　『可笑記』『東海道名所記』（久保田（一九九四））、人情本『春色梅兒譽美』の短歌（玉村（一九九四））に使用例が報告されている。

25　『因果物語』『東海道名所記』（久保田（一九九四））に使用されていたことが分かっている。

参考文献

市地英（二〇一三）「馬琴小説の平仮名字母の研究―読本と合巻の比較―」『成蹊國文』四六号

市地英（二〇一五）「馬琴読本の平仮名字体―『月氷奇縁』『椿説弓張月』『南総里見八犬伝』を資料に―」『成蹊國文』四八号

内田宗一（一九九八a）「黄表紙・洒落本の仮名字体―恋川春町自筆板下本についての比較考察―」『国語文字史の研究四』和泉書院

内田宗一（一九九八b）「『偐紫田舎源氏』の仮名字体―作者自筆校本と板本の比較考察―」『待兼山論叢』三二号

内田宗一（二〇〇〇）「馬琴作合巻『金毘羅船利生纜』の仮名字体―筆耕による表記の改変をめぐって―」『国語文字史の研究五』和泉書院

大島悦子（二〇〇〇）「曲亭馬琴の文字意識――自筆資料の仮名字体について――」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』第十号

久保田篤（一九九四）「仮名草子製版本における仮名の用法（上）」『茨城大学人文学部紀要（人文学科論集）』二七号

久保田篤（一九九五a）「仮名草子製版本における仮名の用法（下）」『茨城大学人文学部紀要（人文学科論集）』二八号

久保田篤（一九九五b）「草双紙の用字法―赤本の仮名字体の用法を中心に―」『国語学論集：築島裕博士古稀記念』汲古書院

久保田篤（一九九六）「恋川春町『無益委記』の表記―平仮名の字体について―」『茨城大学文学部紀要（人文学科論集）』二九号

久保田篤（一九九七）「『浮世風呂』の平仮名の用字法」『成蹊國分』三〇号

久保田篤（一九九八）「『金々先生栄花夢』の文字の用法について」『東京大学国語研究室創設百周年記念国語研究論集』汲古書院

久保田篤（二〇〇二）「江戸時代後期の平仮名・片仮名について」『日本語の文字・表記―研究報告論集―』国立国語学研究所

久保田篤（二〇〇九）「江戸板本の表記の多様性―洒落本『傾城買二筋道』の場合―」『成蹊國文』四二号

坂梨隆三（一九七九）「曾根崎心中の「は」と「わ」―その仮名遣と仮名の字体について―」『茨城大学人文学部紀要（人文学科論集）』一二号

佐藤麻衣子（二〇〇九）「享保期浄瑠璃本の仮名文字遣い―『出世握虎稚物語』における「り」「し」「じ」の調査から―」『国文目白』四六号

玉村禎郎（一九九四）「『春色梅兒譬』における仮名の用字法」『国語文字史の研究二』前田富祺・国語文字史研究会編、和泉書院

野口義廣（一九七三）「浄瑠璃丸本の表記をめぐって―平仮名字体について―」『文献探究』十二号

浜田啓介（一九七九）「板行の仮名字体―その収斂的傾向について―」『国語学』第一一八号

前田富祺（一九七一）「仮名文における文字使用について―変体仮名と漢字使用の実態―」『東北大学　教養部紀要』第一四号

三原裕子（一九九八）「江戸後期咄本における仮名の用法をめぐって」『国文学研究』第一二六集

矢田勉（一九九六）「異体がな使い分けの衰退―トの仮名の場合」『国語学論集（山口明穂教授還暦記念）』明治書院

矢野準（一九九〇）「一九の文字生活―蔦屋黄表紙五種の仮名表記の実態を中心に―」『近代語研究　第八集　吉田澄夫博士追悼論文集』武蔵野書院

矢野準（一九九二）「一九自画作黄表紙の文字遣い：榎本版四種を中心に」『国語国文研究と教育』二七号

（いちじ・えい　平成二十五年博士前期課程修了）

仮名	字体		月氷	弓張月	八犬伝
タ		多	48	133	117
		た	46	1	6
		堂	18	0	0
チ		ち	49	35	24
ツ		つ	20	77	35
		川1	19	3	29
		川2	3	6	0
		徒	9	7	0
		津	0	1	0
テ		て	115	60	88
		天	177	350	288
		亭	5	0	0
ト		と1	157	300	318
		と2	79	0	0
		と3	0	55	23
		登	7	1	0
ナ		奈1	134	21	209
		な	21	83	7
		奈2	0	101	0
		奈3	0	2	0
		那	3	0	0
ニ		尓1	39	315	301
		尓2	274	94	226
		に	16	1	0
		丹	0	61	0
		耳1	1	1	0
		耳2	3	0	0
ヌ		ぬ	13	10	25
ネ		年	1	1	6
		ね	7	6	2
		祢	0	0	5

読本三作品平仮名字体および使用量総覧

仮名	字体		月氷	弓張月	八犬伝
ア		あ	113	97	90
		阿	1	9	0
イ		い	65	99	95
		以	21	2	4
ウ		う	25	50	27
エ		え	5	26	6
オ		お1	17	47	32
		お2	32	0	0
		於	1	0	0
カ		可1	155	297	245
		か	21	35	38
		可2	1	11	0
キ		き	8	75	18
		起	51	25	108
ク		く1	68	144	87
		く2	9	11	4
ケ		介	13	52	28
		け	29	20	63
		希	0	6	0
コ		こ	116	153	72
		古	17	2	23
サ		さ	28	89	104
		佐	1	0	0
シ		し1	236	344	298
		志	45	50	30
		し2	0	34	55
ス		春	106	149	128
		す	0	9	0
		須1	35	15	44
		須2	2	0	0
セ		せ1	28	62	92
		せ2	0	4	0
		世	1	0	0
ソ		そ	56	151	64

仮名	字体		月氷	弓張月	八犬伝
ヤ	や	や	7	22	36
	也	也	18	34	22
ユ	ゆ	ゆ	1	3	7
	由	由1	7	2	4
	由 由	由2	4	1	0
ヨ	よ	よ	50	89	81
ラ	ら	ら	7	15	15
	ら	良1	109	0	0
	ら	良2	0	131	145
リ	り	り	163	312	302
	里	里	30	19	5
ル	る	る1	38	58	58
	る	る2	71	168	161
	る	累	2	2	0
	類 類	類	14	1	2
	流	流1	0	2	12
	流	流2	0	0	3
レ	れ	れ	61	149	115
	連	連	77	48	109
ロ	ろ	ろ	44	23	19
	路	路	0	9	0
ワ	王	王	25	37	36
ヰ	ゐ	ゐ	3	20	3
ヱ	ゑ	ゑ	4	0	3
ヲ	を	を	306	340	255
	越	越	4	7	90
ン	ん	ん	27	71	63

※本表は『成蹊國文』第四十八号に掲載された「馬琴読本の平仮名字体―『月氷奇縁』『椿説弓張月』『南総里見八犬伝』を資料に―」の総覧を検め、数量の誤りを訂正し、画像を差し替えたものです。

仮名	字体		月氷	弓張月	八犬伝
ノ	の	の	287	505	362
	乃	乃	1	0	11
	能	能1	54	14	4
	能	能2	1	0	0
ハ	者	者	36	35	28
	八	八	167	347	357
	盤	盤1	16	13	8
	盤	盤2	1	0	0
	は	は	0	0	1
ヒ	ひ	ひ	32	131	78
	飛	飛	25	5	3
フ	ふ	ふ	60	103	77
	婦	婦	4	3	1
ヘ	へ	へ	72	180	69
	遍	遍	13	0	0
ホ	本	本	3	6	8
	保	保	16	32	12
	ほ	ほ	0	5	4
マ	ま	ま	30	2	6
	末	末	8	74	59
	満	満1	1	0	1
	満	満2	11	4	1
ミ	三	三	26	51	40
	み	み	2	0	4
ム	む	む	19	21	21
メ	め	め	9	24	30
	免	免1	0	1	1
	免	免2	20	0	0
モ	毛	毛1	55	71	72
	も	も	0	163	0
	も	毛2	52	23	0
	毛	毛3	0	0	151
	毛	毛4	3	3	3